

地誌を極める！ ラテンアメリカ編

昭和学院中・高等学校 西岡陽子

■ 地理の授業にあたって

未曾有の東日本大震災から一月半が経ても、広い範囲で余震が続き、東京にいても体感する地震は数え切れない。その震源地は、本震の震源を含む150×450kmに及ぶ広大な海域だけでなく内陸にも及んでいる。マグニチュード9.0の地震がもたらした地殻変動の大きさは驚くべきもので、国土地理院の解析によると石巻市で最大116cm、陸前高田市で84cmなど岩手県から茨城県にいたる広範な沿岸部で地盤沈下が起きており、大潮や満潮のたびに浸水する状況となっている。ストレスをため込んだプレートが弾かれ伸びたことで東北地方の陸地は、大きいところでは5m以上東側に移動した記録もある。大地形の学習では、プレートと関連して、地震学習をぜひ行ってほしい。震度とマグニチュード、地震のメカニズム（プレート型地震と活断層型地震）、緊急地震速報のしくみなどだ。

ウォーミングアップ！

まず、ラテンアメリカという名称に言及したい（以下中川による）。「アメリカ」の由来はアメリカゴ・ヴェスプッチの名にあるのは周知の事実だが、元来「アメリカ」はラテンアメリカをさしていた。19世紀初頭スペイン植民地の独立指導者たちは、自分たちがこの大陸の正統な継承者と考えていたからだ。その後、フランスやイギリスは、この地域を新世界、南アメリカ、ヒスパノアメリカとよんだ。ラテンアメリカの名称の誕生は、1850年代、パリ在住の南アメリカ出身者が、文明の中心フランスと一体であることを求めて、「汎ラテン主義」からとり、今では「ラテンアメリカ」の名称が広く使われるようになった。なお、日本で、外務省はじめ広く使われる「中南米」は、「セントラル・アンド・サウス・アメリカ」と訳すと、メキシコやキューバを含まないから注意が必要である。セントラルアメリカはもっぱら中米地峡諸国をさすからで、「ラテンアメリカ」か「ラテンアメリカ・アンド・ザ・カリビアン」が正しい。

ラテンアメリカは、その面積の4分の3が南北回帰線の間位置する熱帯である。雨季、乾季に分かれる熱帯サバナが最も広いが、年中高温多湿の熱帯雨林気候に属する地域がそれに次いで広い。樹木も生息する生物も種

類の多さが際だつ。農耕と人間居住には厳しいが、熱帯には、快適な地域もあり主要都市のほとんどがこれらの地域に位置する。温暖もしくは冷涼な高地か、低地でも海流や貿易風の影響で酷暑から免れた場所である。

サバナという名称はアフリカでの草原のよび名で、南アメリカのオリノコ川流域ではリャノ、ブラジル高原ではカンボとよばれる。また、パラナ、ラプラタ川流域の温帯草原をパンパとよぶ。なお、熱帯雨林は南アメリカではセルバとよばれる。

雨温図では、気温の折れ線グラフが日頃見慣れているのとは異なり谷型であることに注意したい。生徒にとって、6、7、8月が寒いことを感覚として理解するのは難しい。

なお、ラテンアメリカの砂漠は海岸地方にあり、ほかの大陸で見られる中緯度高圧帯や内陸深くに位置するものでないので注意を促したい（ちなみにアフリカ大陸のナミブ砂漠の成因はここと同様である）。また、ラテンアメリカの新期造山帯地域は、プレート境界にあたり、地震や火山活動の活発な地域であり、マグニチュード7.0以上の地震はここ40年、平均年3回ほど起こっている。ハイチとチリの大地震は記憶に新しい。

ステップアップ！

ラテンアメリカ各地の経済成長は、特定の一次産品の輸出に依存してきた。農産物では、ブラジルとコロンビアのコーヒー、アルゼンチン、ウルグアイは羊や牛の食肉や穀物で広く知られている。とくにアルゼンチンは広大な土地を使う農牧業に特化することを国策にかかげ、19世紀以降農牧業面積は急速に拡大、農牧業生産も著しい伸びを示した。これは「パンパの革命」とよばれ、この結果世界有数の農牧産品輸出国となったのである。

スペインとポルトガルの支配は不平等な土地所有制度を確立し、20世紀にほとんどの国で農地改革が試みられたが、依然としてほとんどの国で土地の配分状況は非常に不均等なままである。

ラテンアメリカが世界の他地域と比べ特徴的なのは、ほぼ均質な言語と文化が多数の国にまたがって広がり、それが共有されていることにあり、中川は指摘する。つまり、ブラジルがポルトガル語を話す以外は、ス

ペイン語が母語となっている地域が多い。しかもこの二つはよく似た言語である。宗教でも人口の90%近くがカトリック信者である。ラテン的価値体系を共有しているとされるが、具体的にどのようなものか、中川は以下指摘をする。個性主義（個人の多様性と主張の強さ）、土地貴族的価値（肉体労働、勤勉、努力に価値を認めず、機知や弁舌を重視）、ペルソナリスモ（国家を信用せず、家族、友人など生身の人間の結びつき重視）、ビベサ（正直、謙虚を低く位置づけ、抜け目のなさ、立ち回りのうまさを高評価）、日常性からの脱却（カーニバルやサッカーでの熱狂）である。日本人の価値観とはかなり異なるものであるが、かれらの気質を見て納得はできる。また、人種的には多種多様な社会であるが、異なった人種間には微妙な差別は存在するものの、融和的であり、アメリカ合衆国のような人種をめぐる激しい抗争はほとんどみられない、と指摘する。

ジャンプアップ！

農産物とともに経済発展を支えてきたのが、豊富な地下資源である。チリは銅、ベネズエラ（OPEC加盟国）は原油で名高い。

1930年代までは一次産品の輸出が経済成長を推進していたが、これ以後輸入代替工業化が開始された。しかし、非効率と労働力吸収能力の低さが伴った。そこで1960年代以降は、輸出指向の工業化が経済発展を推進する主要な役割を担うようになった。1980年代以降、経済は債務危機の悪影響を被り、大きく後退することになったものの、それを乗り越えてきている。

ワークシートの11と12では主要4か国の貿易を輸出品目と貿易相手国で表している。近年、アメリカ合衆国との結びつきが弱まり、中国との結びつきが強まっている傾向にある。ラテンアメリカの経済成長というとBRICsのブラジルと思われがちだが、実は資源の恩恵を受けいち早く成長軌道に乗ったのはメキシコである。1938年の石油産業国営化以来原油の力により大きく発展してきた。アメリカ、カナダといち早くNAFTAを締結し、さらに世界44か国と自由貿易協定（FTA）を結び（日本とも2005年に発効）世界を視野に入れた活動をしている。しかし、輸出はアメリカ合衆国向けが依然多く、今後の課題となっている。

ブラジルは、世界的に豊かな地下資源、食料資源に恵まれている。「カラジャス」鉄鉱山は、量（埋蔵量と生産量）、質ともに世界一を誇る。また、コーヒーの生産と輸出が世界一だけでなく、鶏肉輸出量も世界一であ

る。さらに、代替燃料として注目を集めているバイオエタノールは、おもにさとうきびととうもろこしから生成されるが、その輸出世界一はブラジルである（生産はアメリカ合衆国がトップ）。資源供給国および市場としてのブラジルの魅力は大きい。

チリは、実は、「ブラジルより10年先に行く」といわれている先進国である。チリは国家財政も連続高収入を達成している。このGDPを支えているのが銅をはじめとする地下資源である。リチウム、モリブデン、銀、レニウムなど日本のハイテク産業を支える多くの地下資源を有している。日本では最近チリ産のワインが手頃で人気がある。また、水産資源も日本をはじめ世界各国から期待されている。

アルゼンチンは、ラテン語で「銀」を意味する。首都ブエノスアイレスは、かつて「南米のパリ」とよばれ、町並みもヨーロッパの雰囲気をもっていた。また、かつて世界の大国として移民を受け入れていた。「母をたずねて三千里」のマルコ少年が、母を訪ねてイタリアのジェノヴァからめざしたのがブエノスアイレスである。また、アルゼンチンは現在世界有数の食料資源国である（以上4国については山口による）。

最後に、日本とラテンアメリカとの関係に言及したい。距離的に最も遠い大陸であり、日本から乗り継ぎなしで行ける都市はない。しかし他方で近い関係をもつ大陸でもある。19世紀末に始まった日本人の「中南米移住」の結果、海外に永住している日本人移住者と日系人全体の約半分がラテンアメリカ地域に住んでいる。そのうち約80%がブラジルで、アルゼンチン、パラグアイ、ペルー、ボリビアと続く。故郷に錦を飾るはずであった移住開拓団の生活は当初困窮を極めたが、苦難を乗り越えた結果、現在では、2世や3世が中堅層として活躍しており、中央政界はじめ各界に進出、活躍している。日本が高度成長期に入った1960年代半ばには集団移住の時代は終わり、1980年代に入ると経済の混乱と不況期にあるラテンアメリカの日系社会から日本への出稼ぎ現象がおこった。群馬県大泉町などに日系ブラジル人のコミュニティができている。

■参考文献

- ・国本伊代・中川文雄編著 『ラテンアメリカ研究への招待（改訂新版）』 2005 新評論
- ・A. ギルバート著 山本正三訳 『ラテンアメリカ入門』 1996 二宮書店
- ・山口伊佐美著 『知られざる巨大市場ラテンアメリカ』 2008 日経BP企画